

枇杷園句集

乾

士朗先生以ニ刀圭ノ餘暇ヲ。慕ニ蕉翁之風ヲ。至レ老益篤シ。雖ニ身在ニト城市ニ。心常ニ遊ベリ

丘壑ニ。其所居四窓皆有レ名。南ヲ曰フ朱樹ト。一根ノ赤松。鬱トシ掩ニシ比鄰ヲ。西ヲ曰フ枇

杷園ト。疎雨蕭々。閑ニ彈ニズ四絃ヲ。如ニ珠ノ落ルガ聲ニ。故ニ世或ヘ稱ニ琵琶園主人ト。北ヲ曰フ

絲蓐ト。黃鸝ノ所ノ宿ル也。東ヲ曰フ望山月ト。猿山ノ新月。影升ニ庭樹ト。先生對レ之ニ曰。是レ

吾ガ煙霞疾^{アリ}也。蓋レ其ノ賞心殊在リ月下ニ故ニ其ノ所咏最多シ。嘗テ遊ニ須磨ニ。又吟ニ富嶽ニ而

歸^{レリ}。先生之聲。幾ニ與ニ二勝ニ相並ベリ矣。此集ハ則卓「池椿」堂蕉「雨宇」洋松「兄ガ

所^リ輯^ム也。書成テ。謂フ余ニ序セ^レト之。願フニ余與ニ先生ニ往來最久シ。是以不ノ題ニ其集ニ。

而狀ニスル^テ其行^ヲ如^レ此ノ

文化甲子秋桂子望月白井

枇杷園句集卷之一

春

年内立春

としの内に春は來にけり青筵

歳旦

何事もなくて春たつあした哉

元日子日

松はまだちつぽけなれど花の春

佗盡しゝてぞはなの春

賀

としつむや年ゝに年の美しき

若菜

老がつむ若菜をひとのもらひける

古のわたりにて

道くさは蟹の子もする梅若菜

齊

睦月六日の夕ぐれ杉村とい

ふ處をゆくに、杉の生垣引
をりたる、たゞにこのもし
き菴あり。宵月の西にとい
へるけしきしてやがて齊
を打出たり。

世わすれに齊打らん月と梅

梅

澤山な月日が出來てうめの花

花さいて梅をらぬ日はなかりけり

江の上や二人してをる梅のはな

白梅の大げしきなる野中かな

筑州山鹿のさと秋枝氏求に應

じて若ふびすといふ事を

釣のいとも香に匂ひけり梅の花

きたなきが人のこゝろかうめ乞食

九岳亭

うめがゝや藪の中まで掃ちぎり

初瀬にて

貫之の草のまくらぞうめの花

梅がゝやかたじけなくも宵月夜

芭蕉翁肖像開眼

眼も鼻もひらかせ給へうめのはな

月前

からびたる影の藪木のうめの花

暮雨巷法會

散うめはみな墨染の匂ひかな

五十は山の麓、六十は山の半

腹老の山路大儀にはあれど、

そろゝまゐる。つゞいて來

させませ。

山ふるき春あり梅の下傳ひ

鶯

ほうと啼鶯遠し峰の松

鶯に霞のかゝるゆふべかな

ゆかしきは只鶯のこゝろ哉

北の小庭に鶯の來りたりとて、

庭掃のをことの告たりければ

鶯をもどすな梅に垣ねして

鶯に清瀧の水しづかなり
どこでやら鶯なきぬ晝の月

柳

青柳にうき世の垢はなかりけり

伊勢にて

青柳のあめや小家のひとつ口
首柳や暮て啼續淀の犬

矢矧にて

青柳の東海道は百里かな

若草

われに句なし若草みゆる塘哉

霞

とし寄のぼくく〜とゆくかすみ哉
古高のきげんなほりぬ朝がすみ

初瀬

朝螺貝の初瀬にこもる霞かな

春雪

はるの雪鳥のさはらぬ枝もなし
旅人よ雪はふれども春の空

土山にて

消のこる雪にもあそぶ子供哉

春雨

大佛のあめを見にゆくはる邊哉

春風

明日も出んあすも野に出ん春の風
はる風やむねにあてたる檜がさ

陽炎

陽炎を淋しきものとしらざりき
かげろふやつぶりと落しかたつぶり

春月

春の月雉の遠音に傾きぬ
春の月松にこぼれ竹におろ〜す
糊すれと鳥がなく也春の月

花

とし〜や花守やどの薪一駄
起〜に花見るやどの菜汁哉
散來るを花と見てこそ目はさむれ

泳といふ所にて

このもしき庵やさくらにさひかへり

虎足庵

つ〜と見てをれば散る櫻哉

芭蕉堂新成矣。肖像安置し奉

りて

蝶鳥もみなやすげなり花のかげ

贈吳井

よきことはいひたきものよ花のかげ

宇津の山にて

よきほどに花のかげある山路哉

問たきは花盗人のこゝろかな

芳野行

甲子吟行に曰、ひとりよしの〜おくぞた
どりけるに、まことに山深く白雲峰に重
り烟雨谷を埋んで、と書れたるが、其雨け
ふも降出づ。おぼつかなき欠道を分入て、
とく〜の清水のとく〜と聞ゆるをち
からに山をくだる。つら〜此西行菴の
さま清水のやうを見るに、とく〜の音
心にひびき、散かゝる花袖に清し。芭蕉
翁の、こゝろみに浮世すゝがばやとの

たまひけるを思ひ出るに、身はすゞろに

寒け立ぬ。されば蜚はわれ／＼が訪ひ來

るにも清閑をけがすべけれど、夜はまと

に常住の月澄て、心もいとすみわたり

ぬべし。

世を捨てありくさくらの山路哉

嵐山

松さくら一木置なりあらし山

花七日ものもくはさぬ嵯峨の宿

ふたゝび嵯峨にゆきて

淋しかれとけふこそおもへ花のかげ

木母寺

花に鉦いかなる罪のほろぶらん

年／＼に花の見やうのかはりけり

眉山の花見むと、豊宮崎の文

庫を過て水に添ひて山村に至

る。かり初に分入る山のやが

てすまばやとさへおもひけれ

ば

花の木にむすびかけたる菴も哉

歸路

はなの事いひ／＼もどる山路哉

こゝらの土は錢喰ふ土ぢやに

錢まかしやれ、とうたひゆく

童女に案内させて、辛洲の神

宮に詣づ。

五野行

玉野のやうをみるに、しづかなるを躰と

して淋しきを用とす。鳥の樹に啼水の岩

にむせぶ音、いづれか淋しからざらん。さ

れど躰は一にして用は百千にわかる。百

千にあそぶ人猶多しとせず。況や一にあ

そぶ人をや。世のうきよりは住よかりけ

りと住る人にやあらん。ちいさき松の菴

に文机の外見るものなく、かたはらに同

じさましたる僧のありけるが茶を煮る。

いかなる人にて渡らせ給ふにかと問へ

ど、うち見たるのみにてものもいはず。う

らやましき栖哉と、その石に尻かけて、

花の雲これらも閑ならざるや

いかゞとおもふ心より、かく申出侍りぬ

といへば、あなかしまして、かたはらに

有ける僧の戸をさしこめたるこそ、いと

どこゝろは床しけれ。日は西の山にかく

れて見るものみな麗しく、小倉の山

のをぐらき木の間にぞなりにける。

臘夜やおぼつかなくもほとゝぎす

と口ずさみければ、かの僧の出來りて茶

のよく煮へて侍るぞ、しばしとてむかへ

られたる、いとうれしくてたちいりぬ。

涅槃會

これほどに見事に死ねば佛哉

盗人の返してゆきぬ涅槃像

薪買にゆくひととへばねはん哉

菜花

菜の花に大名うねる麓かな

桂五亭

菜の花にそめよすゞめの柿衣

かくいけれども親すゞめは
させるけしきも見へず、子雀
は先に心得て

菜の花に口ばしそめて啼雀
梅に肥て菜の花吸はぬ鳥もなし

藪入

藪入や小さき箱をうち明て

歸鴈

三夜二夜聲絶て空に雁一ツ

西湖

いま一度堅田に落よかへる雁

熊谷にて

烏雲に入る熊谷の塘かな

蝶

つまゝとすれば蝶ゆき蝶とまる

菫

すみれ草けし人形をこぼしけり

凡巾

鳳巾^{たこ}かけてさびしき夜の柱哉

蛙

浮しづむ夜のけしきを啼蛙
人もふえかはづもふへて山家哉

燕

乙鳥の蝶にもならぬ小貌かな
塩木つむ中を燕の往來哉

雉

かへり來て啼か焼のゝ雉の聲
ほろゝとは花に雉なく拍子哉
閑うつりしては又なくきゝす哉

幻住庵にて

松もとの雉間へけり菫のあめ

雛

ひなの雛花のかげよりみへそめぬ
すゞめ子も來るや雛の膳まはり

桃

伏見にと日くれて來たりもゝの花

沙干 久雨山の聲にて

汐干ともしらで過ゆく波間哉

藤

藤のはなながくもがなとおもふ哉

客半日の閑を得れば、あるじ半日の閑を
失ふ。されば閑は得がたきもの也。小原
の霜にとまなひ、高野の霧にまじはりし
後世菩提の修行者も、閑を得るに骨をり
ければ、柴引むすぶ花のうちに松の枝折
くぶるけふ半日の樂は、主人もゆるし給
ふべし。幽篁に琴を弾て月をのみ友とす
といふ、けふのわがころばへ也。

山藤の棚はしかけし住居哉

題しらず

ふうはりと鶯は來にけり春のくさ
父母のありかを竹になくすゞめ
美しき砂に小松のみどり哉
月花を捨て見たれば松の風
花とりやさらでも竹はみどり也

善光寺に通夜こもりする人の念佛の聲

枇杷園句集 卷之二

は、まつ風にたぐひておびたどし。夜明
るまゝに見れば老たるひと牛に過たり。
まことに佛の手をとらせたまはではと見
ゆ。旅になれたる衣の袖うちはらふけし
きもなく、よろほひ出て群集しけるぞか
たじけなき。

朝な／＼虱掃出す御堂かな

暮春

あさ／＼は寒し春ゆく萩の門
ゆく春をあはれむ竹の日影哉

椿堂輯

夏

更衣

けうこそは父のものの若ん更衣

老慵

更衣人のけしきにおどろきぬ

卯のはな

卯のはなもしらで垣ゆふ男かな

時鳥

美しき空や高晋のほとゝぎす

ほとゝぎす思ひ捨てても月夜かな

むら雨はむら降もするの時鳥

住よしの橋かゝりけりほとゝぎす

野にやまに身は三ツもあれ時鳥

菩提山菴堂にて

念佛を米かむやうにほとゝぎす

なかぬ間上空一ぱいのほとゝ

ぎす とは丈草法師の風興な

り。こよひの月残霞につゝみ

て、ほとゝぎすの來べきけし

きなりとて、二三子は例の瓢

携來て、松下の飲に整の足と

りちらしぬ。

迎には誰をやらうぞほとゝぎす

若葉

逢さかやいつまで寒きうら若葉

御塩殿にて

御塩荷をつくる神のわか葉哉

灌佛

たう／＼と瀧の落こむ茂り哉

尾花が崎をゆき過るに、山

のかたはらに旅ゆくひとの

結縁にとて、むしろの上に

御坐して花御堂をつきすへ

たり。

道ばたで佛はうまれ給ひけり

竹子 蝸牛

たけの子や子供たてこむ寺の門

眠たさに竹の子をりに出にけり
伊勢が家はきのふうれたり蝸牛

牡丹

どくくくと牡丹つけこむ癖の内

芍薬

五六代芍薬つくる山家かな

芥子

白けしに窮屈もなき小家かな
あらし過て又咲出たりけしの花

苔花

苔生ぬはや花咲ぬ露もちぬ

諫鼓鳥

閑古鳥青葉まじりの花の中

蚊帳

連日のあめに日たくるまで

寐すとして

餌ひろふすゝめのありく蚊屋の外

螢

宵の間や大竹原をゆくほたる

粽

此殿やむかしながらのさゝ粽
うれしさにいくらもほどくちまき哉

五月雨

五月雨のいせに鐘なき夕かな

萱津の里

さみだれがやめば屋ね堀る鳥哉

栗手の森

ひとりたつ鷺の白さよ五月雨

竹酔日

たけ植る日もひとの來て遊びけり
竹うゑてまた植にけり苔のはな

竹なき庭は人の住居もきたな

く俗なりといふいにしへ人の

との葉をきゝ覺て、俄に小さ

き竹を植たれば、したゝかに

おもしろき人とはなりたるつ

もり也。

たけうゑに來た貌で啼すゝめ哉

青嵐

むしろ取てたてば舟ゆく青嵐

青田

うゑて去る山田を鹿の通りける

いせ吉兵衛が茶店にあそぶ

田を植るひともかへりぬいさゝらば

松ざかにて

雨雲の垣鼻ゆけば青田かな

水雞

さまよへばくいな啼出る草の門

古井のきと雨々風々亭にて

こゝゆかむ水雞の小田といふ處

紫陽花

紫陽花やみやこを雨の木間より

夕がほ

夕がほやもたせかけたる老の杖

鶺鴒

待ほどもなくて過ゆく鶺鴒哉

金花山の麓に立て

鶺鴒のかどり消て長良に灯の一ツ

短夜

みじか夜や關屋に残る笠の露

夏月

太秦は竹ばかりなり夏の月
夏の月ぬれくしくもみゆる哉

團扇

光琳がちどり啼なり古團扇

清水

鶯の笹葉を散らす清水かな

蟬

蛭の口搔ば蟬なく木かげかな

蓮

晝ねぶる身の尊さよ蓮の花

暑

あつき日や小庭のまつに遊かへり

大蟻のたゞみをありくあつさ哉

雲峰

道ばたに撫子さきぬ雲の峰

夕だち

夕だちや傾て火を焚藪の家

納涼

あらましのすゞみ草なり栗と稗

居こぼれてすゞしき月のむしろ哉

檀溪

すゞしさに人の來ふるす菴かな

丙午の年六月木曾にゆきぬ。

谷のひま／＼雪をつみ、檜原

のおく花を残して、四時のけ

枇杷園句集 卷之三
坤

枇杷園句集 卷之三

秋

初秋

はつ秋の川瀬にたてる小さゝかな

しきひとつとしてのこるもの
なし。何ぞ別に仙境を尋ねむ。

とし寄の多さよ木曾の夕すゞみ
御被

御被してはや花いろの袂哉

宇洋輯

獨坐

松の露落て秋しるひとりかな

ちゝめくや秋たつ竹のぬれ雀

菴の戸へ拾ひ入たり桐一葉

星夕

かも川やたれやらわたる星の夕

天の川紆のすゞみ過にけり

水あひに鳥もゆくか天の川

舟行

一さほに舟漕入れよ天の川

灯籠

灯籠の油ながるゝ榎かな

露

檀溪

露に音あり誰住なれて茶の煙

紫外法師がむかはりの追福の
日、をりにふれて思ひ出る人
くは、丹波の青阿法師舞津
の紀風なり。

白露に取あつめたるおもひかな

いなづま

いなづまや終にすゞしき庭の松
山に居れば稻妻みゆる海の上

舟よりあがりて

稻妻に爪づく淀の塘かな

秋風

あきかぜや舟より舟へゆくからす

秋風の吹すかしけり藪の月

須磨寺は戸を閉にけりあきのかぜ

悼松兄

むつまじきかぎりを師弟の中といへば、
まして此松兄は身にそへる子のたぐひに
て、年のよはひもいと若く、老を捨ては
先だつまじきならひなるに、けうのなげ
きは何事ぞや。

秋風や行空もなき夜の鶴

朝貌

ひや／＼と薨のさく垣ねかな
朝さかぬあさ貌はなし朝な／＼

いくほどの世を薨のまつ枝

蚊屋ごしに薨見ゆる旅ね哉

萩

露萩やむすび捨てたる蠅すだれ
のぞくまでものかく萩の夕かな
よきほどによこるゝ萩の小庭哉

桂五亭

よき夜とて土間にも居たり萩芒
萩にしをれ芒によわる西日哉

萩

虹のねや暮ゆくまゝの萩の聲
これとても老ゆくものよ萩の聲

女郎花

をみなへしみやこはなれぬ名なりけり

芒

陽炎の秋にもあへり花すゝき
芒より出てますをのすゝき哉
淋しさにたへてや野邊の芒散る
霧さめのさとに日のさす芒かな

都にて

法輪のすゝきをかたる雨夜哉

艸花

萩のなく日のさびしさよ艸の花

稻花

湖のみづのひくさよ稻のはな

蓼

明る夜のあらしを啼かきり／＼す

きりくす啼やいつまで瓜のはな

雁

雁並ぶ聲に日の出る河原かな
かならずやくて雁なく門田哉
十日ほど荻吹しきて雁の聲
雁がねに鳥のまじる堅田哉

三河の榎堂を訪ふ日、小舟に
棹さして矢矧川の下流にあそ
ぶ。

はつ雁のおのが空問ふ夕ぐれや

童謡

雁ミ竿になれ、あとの雁先へ
なれ、先の雁あとへなれ、鍵
になれ、竿になれ、竿になれ、
鍵になれ、雁ミさほになれ

雁ひとつさほの雫となりにつり

鶉

わが聲におされてひさる鶉哉

鳴

聲くれてまたたつ鳴もなかりけり

砧

小夜ぎぬた關の東はあはれ也

小松吹伊賀はきぬたの夕哉

芙蓉

月宵く芙蓉日くにはなの露

月

宵くに来るものなれば月を友

須磨行

ひちがき雨の降出ければ、

あやしき小家にはしり入て

海人が家は袖にもたらす月の雨

あかしへゆかむとする曉

須磨すだれ煙るも月の名残哉

あかしにて

月高く鴈がね低し淡路島

蟹が家を覗てありく月夜哉

ひやくと月に聲ある木間かな

萬代や山のうへよりけふの月

松かげのはや月にてぞ有にける

名月といふはめでたき月夜哉

月見とてゆけば錢とる小橋哉

十五日山行

おなじ人と同じ事してあそぶほどおもしろきものはなし。されば二日三日の月のころより、例の人々かたらひかはして、南陽が母の住る露もる山の柴の葎をとふ。白雲跡をかくして、わが來し道もさだかならずといふけしきながら、思ひしよりはいと淺くて、市中を去事わづかに一里、晴嵐夢をやぶりと、現に秋色にたどり入る。木々の梢も月をまねきて、けふの日のくれ初るぞことに嬉しく覺ける。

松やまを枕にあてゝ月見かな

雨の日信濃にゆく人を送るて

娘捨を雨にのぼりぬけふの月

雨晴山月高

海山を洗ひあげたる月夜哉

中秋前一夕雲月をつゝみてく

らく、十五夜は雨いたく降、
風木ををるばかり吹あれてす

だれを揚す。

降あめをながめくらしつけふの月

秋の夜は明てもしばし月夜哉

白園亭

古さどや老の寐さめに出る月

卓池亭

夜もすがら月の傳もちする菴かな

山家に宿かる月のけしきおも

しろければやくも寐す。主

出て此夜ごろ鹿の軒ちかく來

てなくといふに、待となけれ

どこゝろにかゝりて終に其夜

をあかしぬ。

夜あけてもはなれかねたり萩と月

畫 賛

海老を喰ふほとけの膝も月夜哉

贈伯先四十賀

千代の坂路のほどには雪も

ゆ、花もゆ。月の光りはと

によくゆ。

おもしろう年よるひとよ月の秋

となりにはむしろ疊むか月の雲

硯靜亭

いざよひや月になりゆく萩の聲

八月十六日、瓢合といふ事を

して

十六夜の闇にぬれたる瓢かな

井月田にて

いざよひも過て月見る在處哉

十三夜

梅いろの田にたつ人も月見かな

三河紀行

空也上人はこゝろもと葉も世人には引ち

がへておはしければ、わが住給ひける山

の菴のさはがしきとて、都の四條が辻に

菰むしろ引廻して住給へり。そは行徳を

積かさねての上のことこそ。あはれ貴

くかたじけなし。愚癡の身におもひと

るべきわざにもあらず。山にそひ水にそ

ひ、心のはるゝかたもやと、三河の國に

おなじ心したるひとゝをかたらひ出

て、その大樹寺といふ御寺にまうづ。

時は九月十三日なりけり。又、瀧の山寺

といふ處あり。清淨幽閑にして夕霧の底

には水聲を湛へ、白雲の頂には秋の色を

とどめたり。ありがたき地なればとて、

頓て岩根の松かげにこゝろをすましぬ。

名を得たる月なればこそ瀧のうへ

秋 夜

秋の夜や壁にかけたる泣面

秋の夜のありさまを思ひつゞけて書出る

に、紙十ひらにはたらで七ひらにはあま

りあり。いとむつかしきすさびかなと、

其ものゝをかをあへぐれば、みな古へ

人のいひふるしたる古言のみぞ多かる。

うるさしや、きたなしや、墨引けしてか

いまくねたれば又淋しく閑にして、西行

はせをのあとなつかしく、

これ達のすがた作らば朽木哉

朽木はなに／＼、うめかさくらか、思ひ入にはよき木かけながら、山の奥にも鹿の啼ば、こゝすみよしとは誰人かおもふべき。頓て心をひきちがへてかたぶく月にさしむかふに、夜のけしきぞあはれは深き。

秋の夜は山のおくにもまさりけり

秋雨

秋舉が菴にて

住なれしさとこそよけれ秋の雨

こもが浦にて

秋のあめところ／＼に日は入ぬ

彼岸

藪寺の鳩に豆まくひがんな

秋山

枯て久しき松こそみゆれ秋の山

秋水

鷺鴨の毛ごろも染よあきの水

鹿

鹿老て妻なしと啼夜もあらん

イめばけもなしゆけば鹿の聲

音聞山雪江が菴にあそびて

門たてにゆくひともし鹿の聲

秋葉山の藪和田の屋といふ處

にやどりて

啼鹿の聲より深き栖かな

明果てかなしくも鹿の啼音哉

菊

しらぎくの山路わすれぬもあはれ也

むだとに身は老くれぬきくの花

送花叔歸故郷

父母を見るたのしさを菊の花

訪草菴

うらやまし菊もつくらぬ庵の庭

白露のしらでありしか黄ぎく哉

花ことに菊にもあらず八重葎

客中九日

たび人に一枝くれよきくのはな

紅葉

かへり來れば水に散しく紅葉哉

秋暮

西に見る山の高さよあきのくれ

よい月が出やうとするぞ秋のくれ

大蘇亭

日のくれぬ日はなけれども秋のくれ

案山子

おもしろきひとはなりてかどし哉

無題

蜻蛉の十ばかりつく枯枝かな

稻こくや刈や田に焚夕けぶり

片扉閉て久しき菟^{ひさ}かな

松かさよ松露よ菴の灯はほそし

悼如東贈帶梅

あきはものゝ人の親さへつれてゆく

八月八日の日、遊行上人近江の國へわたり給ふとてひしめく。やがて四十九院といふ處につかせ給ふ。輿の内をみれば髪髭はおどろにして御膝の上をもすきて、いと殊勝にぞまし／＼ける。

おどろふくあきや遊行の旅の空

東須磨にて

何をしてひとくらすぞ須磨の秋

九月十六日、遠江の國有玉と

いふ處にて

月と日の間に澄り不盡のやま

卓池軒

枇杷園句集 卷之四

冬

時雨

はつ時雨野守が宵のことばかな
鳴海にてしぐれそめけり草鞋の緒

竹葉軒

さゝ竹にさやくと降りしぐれ哉

獨居や古人かやうの小夜しぐれ

芭蕉忌

世にふるはさらにはせをの時雨哉

素堂は蕉翁の善友なり。一日風のばせを

の破れやすく、霜の荷葉のかるゝを悲し
み、世の形見草にもとて甲子吟行を評し
て曰、靜なるおもむきは秋しべの花に似
たり。その牡丹ならざるは隱士の句なれ
ばなりと。けふまた其靜なる趣を弄して
手向草とす。

月時雨さりとては古きけしきかな

一雲に夜はしぐれけり須磨明石

山茶花に手をかけたれば時雨けり

茶室迎友

窓ふたになるやしぐれの松のかげ
夜しぐれに小鮠焼なる匂ひかな

東門公子と申奉る公子おはします。雪後

の野邊に狩くらし御獲ものあまたあ
り。中に雁ひとつを平の士文子に下さる。

此士文子琵琶の上手になんありける。其

家に吳捌といふ家の子あり。ちか頃あら

たに、はつ音といふ琵琶造り出してま

るらせたり。そがはつ音聞まほしとて、

人々の入つどひ給ふ夜は、かの雁たま

ひたりける夜なりけり。荻野檢校、その

夜の宗匠として四絃かきならしたりけれ

ば、嘈々切々と聲をまじへ、まことにあは

れにして、時雨も月もけしきをはこび

ぬ。

時雨來るか雁がはつ音の琵琶の上

かゝる夜のありさまこそ世の勝事なれと

て、琵琶ひらきのと葉をつどりぬ。

落葉

落葉たく軒のまつ風夜をさらす

あさくや落葉揺下す屋根のうへ

不破の關にて

霜にあけて馬の鼻ふく落葉哉

大和の國を行脚して敵火のやまはいづこ、耳なし山はどれぞとたづねづりく。水のあなたに樵夫の立たるを呼かけて、のう／＼もの申さん、のう／＼もの問むとひしめけど、聞とがむるけしきもなければ、

此人も耳なし山よ落葉揺

木枯

こがらしやけさはふへたる池の鴨

梅問亭

ちらく／＼と日もこがらしの苔の上

こがらしや口にく／＼鶯のうつくしき

こがらしや梅一ばいに出る月

網代守

宇治に妻ありあじろにかゝる思ひ哉

千鳥

生海鼠ほす袖の寒さよ啼ちどり

柿寺や藪のうちに啼ちどり

五道亭

鶯鳴がなければ枯たつ蘆邊哉

大津にて

湖を鴨で埋たる夜あけかな

冬月

あくまでも閑に、出たり冬の月

さりく／＼と苔ふむ冬の月夜哉

さまく／＼と降あぐ空や冬の月

大魚追悼

泣は父なかるゝは子よかれ尾花

枯野

むつまじう住やかれ野ゝひとつ家

詩仙堂歸路

丈山のさたもくれゆく枯野哉

訪野雀

かれく／＼や野邊に出向ふ庵の犬

麥阿が菴を訪ひて

これ見よと霜の田芹を菴の窓

花にかたらひ月にちぎり夫妻の枕は、五

百生の宿縁と聞へながら、一夜の露とき

えぬるぞはかなき。青霞も此悲びに逢り。

そが中にいたはしきみどり子の残れるあ

り。いまだはへばたて、たてばあゆめと

いふばかりにはたらで、花ちるあとの實

一ツを見るこゝちせらる。是も又なみだ

なれとせめてものちから艸也。

山吹の實や霜塞き枕もと

鵜沼のさを経て關にゆく

雉も啼犬も霜夜の山邊哉

氷

勝山を舟さし下せば藤竹引

まとひて日を見ず、風あら

く雪さへ降て寒さはだへを

徹す。

白浪のかけては氷る小ざゝかな

冬木立

芭蕉翁百回忌千句巻頭

ちなみよるもの無量也冬木立

雪

青天に雪の遠山見へにけり
はつ雪や人のくれたるひの木笠
曙やあらしは雪に埋れて
雪掃やわがあとへ来て啼雀
さはつても雪は降なり奥山家
月雪やこよひも月は宵の内

金

笹に音あり衾にさはる夜もすがら

鉢たゝき

あともなき麻さめの友よ鉢たゝき
南無月夜南無雪時雨鉢たゝき

歳暮

年のまさに暮むとする日、末森といふ所
にゆく。爰に湖水あり、猫が洞といふ。藤
竹をよち溪水をわたりて其上に出づ。池
塘尾花枯て雪のどく、鳬鷗影沈て水底に
清し。是より路を西にとれといふ。苔路中
く、に廣く、松高して民家適に見ゆ。い

さや年の用意にとて蓬萊のかざり松齒朶
やうのもの引とりて、

ゆくとしの廿九日も子の日かな

こはことしむ月の一、したしきもの三
五輩暮雨巷の大人にいざなはれて共に子
日せし處也。竹にあげ柳にくれ、はなほと
とぎす月雪とのさばりつゝ、おもはずも
亦爰にめぐり来て、一年の始終を松によ
せたる事、いとめでたくいと感あり。

野秀亭

煤はきや飴の鳥うる藪のかげ
ゆくとしのこそりともせぬ山家哉

年もはや小松うり来る日、市
上に立て童觀を見る。

としくれぬ松葉角力のあらそひに

花月一變のあそびにけふの日
も既にくれて、としもはや一
瓢の酒の残りすくなく成けれ
ば

瓢箪で餘おさへてとしくれぬ

枇杷園句集 卷之五

雜

倉澤

けふも見へくけり不盡の山

よしのゝ海月が四十の賀に

よしの山若きはひとの耻かしき

大空に隈なき鶴のよはひかな

住わびてかしこき竹のはやし哉

海人の子等の潮の干潟にむれ出て、沙木
拾ひあるきけるが、頓て沙みち來れば、み
な蘆邊をさして歸りけり。さて驚かした

蕉雨輯

るにはあらねど、おりぬる渴のなくなれば、聲／＼に立あがりて多くの鶴の鳴ゆくは、幾千代を重ねたらんといとめでたし。

鶴啼やからりころりと和歌の浦

大黒賛

、花よ實よ四時^{よじ}かやうの子の日草

多春園の櫻見せさせ給ふ。参りてうかゞひ侍る。泉石のやうは申さず、抑木を植ること子のどく植させ給ふ。七日の日早き櫻はちり浮びて、汀のけしきことに／＼おもしろし。かの花の上漕と聞へたる象潟の景色もおもひやられて、花に漕出よ小さ／＼舟とはつゞけ侍れど、こゝにかしこに心も身もはしりありきて、五文字はいまだとゝのはず。遅さくら木深き處に分いりて停雲岡に登る。

朝上停雲岡 雲在花深處

暮下停雲岡 花深雲未去

舞津晚宴

東望三千五百峰 晚雲中斷出芙蓉

芙蓉白雪千秋色 長入園林照古松

平曲會式

床頭置琵琶二面。

彈中或弦斷則預設一面急以代之。

曲中禁談笑、吸烟管、打唾壺、

必應有意。凡曲調者貴舒暢、舒暢則說盡。

心中無限事

鶯の聲こまやかに月の光閑なり

何の御時にかありけん。瀧のもとに連歌

あそばされけるに、岩走る水の音の心に

さはりて、句案にわづらはしくおほ（は

か）せばとて、頓て瀧壺に松が枝を打入

させて、音をとどめ給へり。ありがたき

事にこそ。

曲終不收撥、更唱祝世之句。

舉坐助音

ことぶきの曲終て撥を弦のうち

にはさむ。

脱袴。

把盃。

洋服在心。形素（？）已忘。蕩然

山頽。亦復不妨。

飄散並序

形便々としてみづから不用の才をたのみ、自然をたのしむ飄有。ある翁の是に一口をひらき給へば、居然として忽有用の物となる。赤人の莖、西行の庵の落花、寂蓮顯性（昭）の歌の反古、高野大師の爪印、芭蕉の翁の雪と雪、越人が風雅の藻思までもみなおし入たれば、さらに便々として磊落たり。飄散じて言て曰。わが自然をうしなへり。わが自然を失へり。翁叱して曰。汝に炭をもらば何とかいは

ん。曰。寂し。酒をもらば何とかいはん。
曰。躁し。米をもらば何とかいはん。曰。
静なり。又叱して曰。閑ならば汝何ぞ自
然をたのしまんや。飄、愕然として歌て
曰。

鷗く機をわすれたる鷗

同じ流の藻塩草 虚飄

鷗く機をわすれたる鷗

同じながれのふる飄 虚飄

ながれ出ばや冬の海 虚飄

松兄輯

い

朱樹の翁、常にいへる事あり。一年三百五十
餘日、風月花鳥をそゝのかして、日々に狂吟
すること三百餘句、自得のものわづかに八
九餘はみな棄つと。こゝをもて年々、叟自得
の八九を拾ひあつめて、琵琶園句集なせり。
かくて風月狂吟の情をしたふは、輯る者の
雅情といふべし。

布足庵

丘山輅

東壁書房水雲庵東四郎

坤 集句園杞枇